様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：８０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０９００

研究課題名（和文）古代日本列島北部地域における文化集団の移動に関する基礎研究

研究課題名（英文）Basic Research on the Migration of Ancient Cultural Group in the Northern Part of the Japanese Islands.

研究代表者
鈴木　琢也（suzuki, takuya）

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号：４０３４２７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：
この研究では、次のことを明らかにした。北海道では、8世紀初頭を画期として続縄文文化の土壙墓とは異なる末期古墳が築造され、土器組成が東北地方土師器文化と同様のものになる。これらのことは、東北地方土師器文化集団が北海道に移動したことを示すものと考えられる。
8世紀ころは、続縄文文化と東北地方土師器文化との人的、文化的な接触により、東北地方土師器文化の墓制・葬送や土器組成、住居形態などの文化要素が続縄文文化に受け入れられ、擦文文化が成立していく文化変容の画期である。

研究成果の概要（英文）：
In this study, I clarified the following things. In Hokkaido, at the beginning of the 8th century, during the transition between both eras, mounded tombs built at the end of the Kofun period were constructed as opposed to the pit burials of the Zoku-Jomon culture, and the shape categories composition became similar to that of the Tohoku region's Haji ware culture. These things indicate that it is possible that groups from the Tohoku Region's Haji ware culture migrated to Hokkaido.
Around the 8th century, human and cultural contact between the Zoku-Jomon culture and Tohoku Haji ware culture resulted in Haji ware cultural elements-such as grave and funeral systems, shape categories composition, living arrangements, etc.- being accepted in to the Zoku-Jomon culture, creating a transition period of cultural transformation that formed the Satsumon culture.

研究分野：考古学

キーワード：擦文文化　末期古墳　続縄文文化　オホーツク文化　北海道　東北地方北部　文化交流　古代

１．研究開始当初の背景

古代の北海道と東北地方の文化接触や交流、物流･交易の研究は、北方文化、あるいは北方史研究で考古学と文献史学が学際的に研究を進めてきた課題である。研究代表者も早くからこの研究に着手し、平成 15～24 年度に若手研究(B)を受け、①10 世紀以降、擦文文化と本州文化の物流･交易が隆盛することを明確にし、擦文文化集団が本州への交易品である毛皮類、鷲羽などの獲得を目的に北海道全域へ拡散、定住していくことを明らかにした。さらに、②古代における北海道から東北地方、本州中央部の「都」へといたる交易ルートの実態を具体的に明らかにし、日本列島北部における地域間交流のありかた、古代国家と北方地域との関係など交易システムや物流経済の構造を明確にした。

この研究を進めるなか、8 世紀ころの北海道では、東北地方北部土師器文化との文化接触や交流あるいは物流･交易が活発化し、墓制･葬送に関わる文化、土器文化などが大きく変化する文化的な現象がみえてきた。

これまで、北海道と東北地方の文化接触や交流、物流･交易などの研究は、交易品となる「モノ」の間接的な移動を中心に進められてきたものであり、その基層となる直接的な「文化集団の移動」にともなう文化接触や文化変容などの研究は、誰も行っていない未着手の課題である。すなわち、北海道における墓制･葬送の変化、土器文化の変化、竈を有する竪穴住居の普及などに焦点をあて、東北地方北部土師器文化との比較考古学的な研究を行うことにより、東北地方北部から北海道への文化集団の移動、さらには古代北海道の文化的、社会構造的な変化を明らかにすることが新たな研究課題となってきている。

また、この比較考古学的な研究に加え、文献史学的な研究視点から文献史料、木簡、墨書･刻書土器にみられる文化集団の移動に関連する記述を検討し比較研究を行うことにより、文化集団の移動の実態を明確にすることも新たな研究視点として必要不可欠である。これらの研究背景から本研究を実施するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、古代における本州東北地方北部から北海道への文化集団の移動を明らかにすることにある。

具体的には、北海道における末期古墳の成立、土器文化の変化、竈を有する竪穴住居の普及など東北地方北部土師器文化の影響を受けた文化要素の変化を、「比較考古学的手法」と「文献史学的手法」から総合的に検討することにより、文化集団の移動の実像を解明するものである。さらに、この文化集団の移動にともなう古代北海道の文化的、社会構造的な変化を明らかにするものである。

３．研究の方法

本研究では、北海道と東北地方北部の考古学資料の比較研究を主体とする「比較考古学的手法」により、この地域間の末期古墳や住居址の構造(特性)、あるいはその出土遺物の共通性、非共通性から文化集団の移動を検討する。さらに、「文献史学的手法」により文化集団の移動に関連する記述を検討し、これらの総合的な比較研究により具体的に次のことを明らかにする。

(1)比較考古学的手法による研究

①北海道古代(8～9 世紀)の末期古墳と周辺集落の住居址について、その構造や特性、立地環境などを続縄文文化(紀元前3世紀～後7世紀)の墳墓や住居址と比較検討し、北海道末期古墳を築造した文化集団を明確にする。

②北海道古代の末期古墳と周辺集落の住居址から出土した土器、鉄製品などの遺物を、続縄文文化の墳墓や住居址から出土した遺物と比較検討し、北海道古代の土器文化を担った文化集団を明確にする。

③北海道と東北地方北部の末期古墳と周辺集落の住居址について、その構造や特性の共通性、非共通性を比較検討し、末期古墳を築造した文化集団の移動を明らかにする。

④北海道と東北地方北部の末期古墳と周辺集落の住居址から出土した土器、鉄製品などの遺物について、その共通性、非共通性、時期差などを比較検討し、土器文化を担った文化集団の移動の実態を明確にする。

(2)文献史学的手法による研究

①文献史料に示される東北地方北部から北海道への人の移動に関連する記述を集成し、史料から文化集団の移動の状況を検討する。

②木簡、墨書･刻書土器など文字資料に示される東北地方北部から北海道への人の移動に関連する記述を集成し、文字資料から文化集団の移動の状況を検討する。

③文献史料と文字資料にみられる記述の比較により、東北地方北部から北海道への文化集団の移動ルートのモデルについて時間軸を含め検討する。

４．研究成果

本研究の成果は、次に示すとおりである。(1)～(4)は主として比較考古学的手法による研究成果であり、(5)は主として文献史学的手法による研究成果である。(6)は研究成果のまとめ、(7)は研究成果の位置づけ、(8)は展望を示したものである。

(1) 墓制･葬送の変化

北海道では 8 世紀を画期として、それまでの続縄文文化の土壙墓とは全く特性の異なる末期古墳が築造される。この末期古墳は、江別市後藤遺跡、同町村農場 1 遺跡、札幌市 K39 遺跡医学部陽子線研究施設地点、同 K39 遺跡北区北 7 条西 6 丁目地点、恵庭市西島松 5 遺跡、同柏木東遺跡、千歳市ユカンボシ C15

遺跡、同ユカンボシ C1 遺跡など 8 カ所で確認され、その分布は石狩低地帯の石狩川水系河川下流域に集中している。これらは、東北地方北部の北上川水系流域、太平洋沿岸の馬淵川水系河口域、奥入瀬川水系河口域、三陸沿岸の河川河口域、日本海沿岸の雄物川水系流域、米代川水系流域、岩木川水系流域に分布する末期古墳と同様の特性を有するものであると考えられる(鈴木 2012・2016a・b・c)。

鈴木(2012・2016a・b・c)は、北海道にみられる末期古墳と土壙墓(3〜9 世紀)の規模、平面形状、墓葬形態の特徴、埋葬などを比較検討し、末期古墳と土壙墓(3〜9 世紀)の特性や埋葬が大きく異なることを指摘した。この概要は、次のとおりである(表)。

3〜6 世紀の土壙墓は、平面形状が円形・楕円形主体である。配石、袋状ピット、礫の配置、杭状小柱穴、ベンガラが出土するものがみられ、埋葬法は屈葬である(表)。

7 世紀の土壙墓は、平面形状が隅丸長方形、楕円形主体である。3〜6 世紀の土壙墓と同様に袋状ピット、礫の配置、杭状小柱穴がみられ、埋葬法は屈葬である(表)。新しい要素として、木槨(木棺)がみられること、袋状ピットが土壙墓の壁面につくられること、埋葬遺体の頭部付近に 2 個の礫を配置することなどがある。

8〜9 世紀の土壙墓は、平面形状が隅丸長方形主体である。7 世紀の土壙墓と同様に袋状ピット、礫の配置、杭状小柱穴、木槨(木棺)がみられ、埋葬法は屈葬である。新しい要素として、土壙墓の掘り込みが浅く、低い盛土を有するものがあるなど東北地方北部の末期古墳の影響がみられる(表)。

8〜9 世紀の末期古墳は、埋葬主体部の平面形状が長方形で、長軸が長く、掘り込みが浅い。しかも、墳丘や周溝、「四辺埋め込み式の木槨(木棺)」がみられること、埋葬法が伸展葬になることなど東北地方北部の末期古墳と同様の特性をもつものである（表)。

これらのことから北海道では、8 世紀を画期として東北地方北部と同様の特性をもつ末期古墳と、続縄文文化の土壙墓の特性に加え末期古墳の特性を受けいれた土壙墓の二系統からなる形態の変容がみられるようになる。しかも、北海道の末期古墳は、3〜7 世紀までの続縄文文化の土壙墓と隔絶したものであり、その規模や平面形状、墓葬形態、埋葬法のほぼ全てが東北地方北部の末期古墳と同様の特性をもつものである。このことから、北海道の末期古墳は北海道在地の集団が築造したものではなく、末期古墳を築造する技術をもつ東北地方土師器文化集団が北海道に移動・往来し、築造したものと考えられる。

すなわち、東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来にともなう直接的な文化接触が北海道の墓制・葬送に大きな影響を与えたものと考えられる。

(2) 土器型式・組成の変化

北海道では 8 世紀を画期として、土器の型式とともに器種組成様式も大きく変化する(鈴木 2011a・2016a・b・c)。7 世紀の土器の器種組成様式は、深鉢形土器、注口形土器、片口形土器、鉢形土器からなり、この器種組成様式は、続縄文文化後半の時期以来、系統的に受け継がれたものである。8 世紀の土器の器種組成様式は、長胴甕形土器、球胴甕形土器、甑形土器。鉢形土器、坏形土器、高坏形土器からなり、新たな器種組成様式が北海道に伝わったものである。8 世紀の土器の器種組成様式は、続縄文文化からつづく北海道独自のものではなく、東北地方土師器文化の影響を強く受けて新たに成立したものであり、土器型式も同様に変容する。すなわち、8 世紀を画期に新たな土器組成が成立し、土器型式も変容したことを指摘できる。8 世紀の画期は、続縄文文化の土器組成・型式が東北地方土師器文化の影響を受けた擦文文化の土器組成・型式へ移行するという大きな変化があったのである。

(3) 集団の移動にともなう文化変容

これまで示してきたように、北海道では 8 世紀に文化が変容する大きな画期があることを指摘してきた。これらの文化変容は、①北海道に末期古墳と、その影響を受けた土壙墓の二系統からなる墓の形態がみられるようになること、②続縄文文化後半の時期以来、系統的に受け継がれた土器組成から注口形土器、片口形土器が消失し、新たに坏形土器、高坏形土器が土器組成に加わり東北地方土師器文化の土器を模倣したものが使用されるようになることなどである。これらの文化変容は、本州文化の影響を受けたものであり、東北地方土師器文化集団の移動・往来による北海道在地集団との接触で成立したものといえる(鈴木 2016a)。

墓制・葬送の変化は、続縄文文化集団が北海道に移動・往来した東北地方土師器文化集団の墓制・葬送を受け入れ、擦文文化の墓制・葬送へと移行していく過程を示すものである。土器型式や組成の変化は、続縄文文化集

特性の分類 / 土壙墓・末期古墳	円形	楕円形	隅丸長方形	長方形	ベンガラの検出	袋状ピット	配石	礫の配置	杭状小柱穴	木槨(木棺)	墳丘(盛土)	周溝	石敷	埋葬
3〜4世紀の土壙墓					↓									側臥屈葬
5〜6世紀の土壙墓									?					側臥屈葬
7世紀の土壙墓							?							側臥屈葬
8〜9世紀前半の土壙墓	↓	↓	↓			↓	↓		↓		↓			側臥屈葬
8〜9世紀前半の末期古墳				↓				↓				↓		伸展葬
八戸市丹後平古墳群				↓						↓	↓	↓	↓	伸展葬

表　土壙墓・末期古墳埋葬主体部の特性と埋葬(3〜9 世紀)

団が、北海道に移動・往来した東北地方土師器文化集団の使用する土器を模倣し、その土器型式や組成を受け入れたことによるものである。この注口形土器、片口形土器の消失により、続縄文文化が終焉し、新たに東北地方の土師器の土器組成からなる擦文文化が成立する。すなわち、8～9 世紀の北海道の土器には、北海道に移動・往来した東北地方土師器文化集団が製作したものと、擦文文化集団がそれらを模倣したものとの二系統の土器があることを指摘できる(2016a)。

また、この時期には東北地方と同様の竈を有する竪穴住居が石狩低地帯を中心に定着するようになる。このことは、続縄文文化集団が、北海道に移動・往来した東北地方土師器文化集団の竪穴住居を模倣し、その住居形態や竈の使用を受け入れたことによるものと考えられる(2016a・c)。

これらのことから、8 世紀には、東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来にともない、続縄文文化の墓制・葬送、土器組成、竪穴住居などが東北地方土師器文化の影響を受けたものに大きく変容し、擦文文化に系統的に受け継がれていく新たな墓制・葬送、土器組成、竪穴住居が出現する。すなわち、この時期は、北海道在地の文化である続縄文文化と東北地方土師器文化との人的、文化的な接触により、東北地方土師器文化の文化的要素が続縄文文化に受け入れられ、擦文文化が成立していく文化変容の画期である。

(4)須恵器・横走沈線文系土器からみた北海道と秋田(出羽国)の物流・交流

8 世紀後半～9 世紀は、石狩低地帯の石狩川水系河川下流域が北海道における物流の拠点的な地域として優位性をもち、この地域の擦文文化集団と律令国家勢力あるいは、その勢力下の東北地方土師器文化集団との秋田城を通じた「日本海ルート」による物流・交易、交流が展開する。このことは、この時期の須恵器や鉄製品の物流などから明らかにすることができる。須恵器の物流をみていくと、北海道における 8 世紀後半～9 世紀の須恵器の分布は、石狩低地帯の遺跡に集中し、

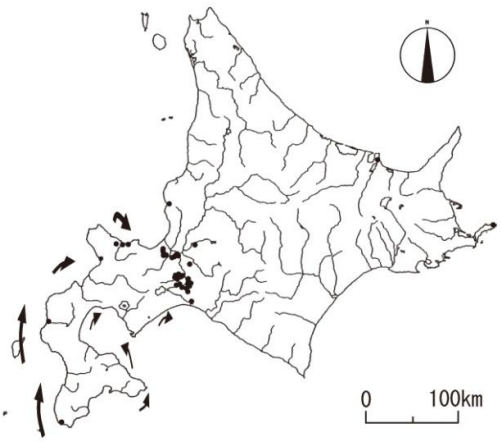

図 1　北海道における須恵器の分布
(8 世紀後半～9 世紀)

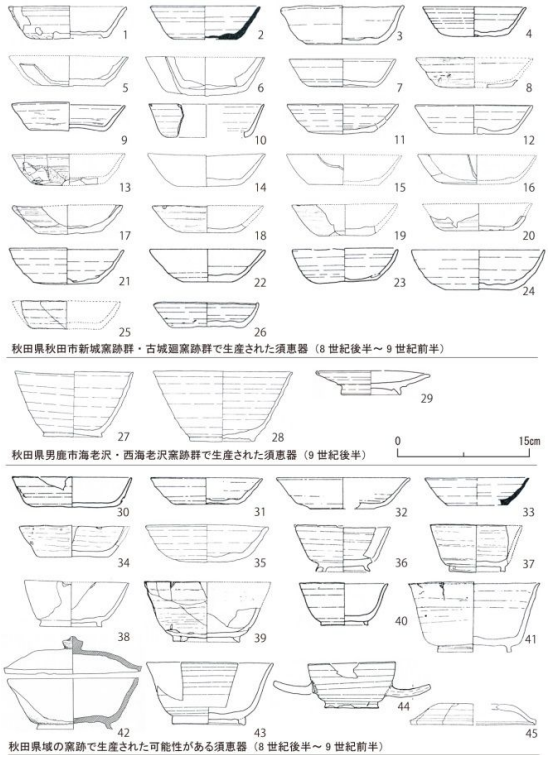

図 2　北海道出土の秋田(出羽国)産須恵器
(8 世紀後半～9 世紀)

秋田城周辺の須恵器窯である秋田市新城窯跡群、同古城廻窯跡群あるいは男鹿市海老沢窯跡群、同西海老沢窯跡群などで生産された秋田(出羽国)産須恵器が多くみられる（図 1・2、鈴木 2016ａ・ｄ）。また、これら秋田(出羽国)産須恵器は、青森～北海道の日本海沿岸域の遺跡からも出土している。このことから、秋田(出羽国)から、青森の日本海沿岸域を経由した「日本海ルート」により、北海道石狩低地帯に秋田(出羽国)産須恵器がもたらされたことが指摘できる。この時期の鉄製品の分布についても、石狩低地帯の遺跡に集中し、須恵器と同様に秋田(出羽国)を主体とする地域から「日本海ルート」により北海道石狩低地帯にもたらされた可能性がある。先述した男鹿市海老沢窯跡群・西海老沢窯跡群で生産された須恵器は、北海道東部（最東端）に位置する根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群からも出土している（鈴木 2016ｄ）。このトーサムポロ湖周辺竪穴群は、オホーツク文化の集落遺跡であり、そこから秋田(出羽国)産須恵器と擦文土器が出土している。さらに、この時期の蕨手刀の分布についても、石狩低地帯の擦文文化の遺跡と、枝幸町目梨泊遺跡、網走市モヨロ貝塚などオホーツク文化の遺跡にみられることから、秋田(出羽国)産須恵器や蕨手刀などの多くは、石狩低地帯の擦文文化集団の中継により、日本海～オホーツク海ルートでオホーツク文化集団にもたらされていたものと考えられる

また、北海道石狩低地帯の石狩川水系河川下流域の竪穴住居跡では、横走沈線文土器と秋田(出羽国)産の須恵器が供伴して出土し、多条横走沈線文土器と秋田(出羽国)の窯で

生産された可能性がある須恵器が供伴して出土している。さらに、秋田城跡 1096 号竪穴建物跡、秋田市大平遺跡 1 号竪穴住居跡などでは、横走沈線文土器や多条横走沈線文土器と、秋田(出羽国)産の須恵器が供伴して出土している。しかも、多条横走沈線文土器の分布は、青森県日本海沿岸の岩木川水系下流～中流域、同日本海沿岸の河川河口域、同陸奥湾沿岸の河川河口域、同下北半島の河川河口域にみられ、北海道日本海沿岸の河川河口域にもみられる(鈴木 2016a･d)。すなわち、多条横走沈線文土器と須恵器の供伴関係やその分布から、8 世紀後半～9 世紀には、多条横走沈線文土器を使用する地域集団が、秋田(出羽国)の律令国家勢力との交流や物流に関わっていた可能性があり、秋田(出羽国)から青森の日本海沿岸域を経由し、北海道石狩低地帯に至る「日本海ルート」による物流･交易や交流を担っていたと考えられる。

(5)文献史料からみた北海道と秋田(出羽国)の物流･交流

8 世紀後半～9 世紀は、先に示した須恵器の物流の様相などから、石狩低地帯と秋田県域(出羽国)を主体とする地域の間で「日本海ルート」による物流･交易、交流が展開していた。このことは、文献史料からも裏付けられる。例えば、次に示す 8 世紀後半～9 世紀の史料からは「渡島蝦夷」、「渡島狄」などと呼ばれた北海道地域の人びとと、出羽国(秋田城)との関係がうかがわれる。

①780 年:『続日本紀』(宝亀十一年五月条) 、鎮狄将軍・出羽国司に渡嶋蝦夷を饗応する際によく教えさとすよう命じる。②802 年:『類聚三代格』(巻十九禁制事)、出羽国で王臣諸家が渡嶋狄と私的に毛皮などを交易することを禁止する。③875 年:『日本三代実録』(貞観十七年十一月十六日条)、渡嶋の狄が八十艘の水軍で秋田郡・飽海郡を襲ったため、出羽国司に追討を命じる。④878 年:『日本三代実録』(元慶二年九月五日条)、出羽国司に対して小野春風の率いる陸奥国の援軍を返してもよいこと、津軽･渡嶋の俘囚には状況を見極めて対処し、戦功のあった蝦夷に恩賞を与えることなどを指示する。⑤879 年:『日本三代実録』(元慶三年正月十一日条)、出羽国が反乱軍からの降伏者を受け入れ、また征夷軍に従った渡嶋蝦夷と津軽俘囚を慰労したことを報告する。この時、渡嶋夷の首長 103 人が同族 3000 人を率い秋田城に詣で服属した。⑥881 年:『日本三代実録』(元慶五年八月十四日条)、元慶の乱の際に無許可で不動穀を支出して、渡嶋狄らを饗応した出羽国司の責任を免除する。⑦893 年:『日本紀略』(寛平五年閏五月十五日条)、出羽国の渡嶋狄と奥地の俘囚との戦闘に備えて、出羽国司に城塞の警備を命じる。

これらの文献史料からは、「渡島蝦夷」、「渡島狄」などと呼ばれた北海道地域の人びとと、秋田県域(出羽国･秋田城)との間に饗応や服属などにともなう往来や交流(時には争い)があり、交易が活発に行われていた状況もうかがわれる(鈴木 2016a･d)。すなわち、これらの史料と、先に示した須恵器や鉄製品などの物流の状況とをあわせて検討すると、北海道の擦文文化集団が「日本海ルート」を通じて、出羽国秋田城の律令国家勢力と朝貢や饗応などにともなう交易や交流を行っていた状況が推定できる。8～9 世紀の北海道から本州側への主要な交易品は毛皮類であり、この毛皮類と本州産の鉄製品・須恵器との交易が北海道の擦文文化集団と出羽国秋田城の律令国家勢力との間で展開していたものと考えられる。

(6) 研究成果のまとめ

「比較考古学的手法」と「文献史学的手法」により、古代における本州東北地方北部から北海道への文化集団の移動について検討した結果、次のことが明らかになった。

①北海道では、8 世紀初頭を画期として続縄文文化の土壙墓とは異なる末期古墳が築造され、土器組成が東北地方土師器文化と同様のものになる。これらのことは、東北地方土師器文化集団が北海道に移動したことを示すものと考えられる。

②8 世紀ころは、続縄文文化と東北地方土師器文化との人的、文化的な接触により、東北地方土師器文化の墓制･葬送や土器組成、住居形態などの文化要素が続縄文文化に受け入れられ、擦文文化が成立していく文化変容の画期である。

③須恵器の物流、多条横走沈線文土器の分布、鉄製品の物流からみると、8 世紀後半～9 世紀には擦文文化集団と秋田(出羽国)の律令国家集団との日本海ルートによる物流･交易、交流が展開していたと考えられる。

④8 世紀後半～9 世紀の史料には、北海道地域の人びとと、出羽国秋田城の律令国家集団との間で朝貢や饗応にともなう交流や交易が行われていたことを示す記事がみられ、擦文文化集団と秋田(出羽国)の律令国家集団との日本海ルートによる物流･交易、交流が展開していたことが裏づけられる。

(7) 研究成果の位置づけ

東北地方北部から北海道への文化集団の移動は､後の中世･近世アイヌ文化を担う北海道、東北地方北部、サハリン、千島列島のアイヌ文化地域集団の実像を検討する基層となるものであり、考古学はもとよりアイヌ文化研究、北方史、北方文化研究などに本研究が果たす役割は大きい。

(8) 展望

これまで研究代表者が進めてきた北海道と東北地方における文化集団の移動や物流交易の研究は、主に 8～11 世紀の古代（擦文文化期）を対象にしたものである。また、中世（アイヌ文化期）における北海道と東北地

方の物流交易の研究は、中世考古学・中世史研究者などにより進められているが、その対象は 14 世紀後半～16 世紀が中心である。古代から中世あるいは擦文文化期からアイヌ文化期へと移行する時期を含む 12～14 世紀前半の物流交易の研究は、北海道におけるこの時期の本州産陶磁器や鉄製品などの検出数が少ないことなどから、これまで研究の空白となっているのが現状である。さらに、この地域の古代から中世（擦文文化期～アイヌ文化期）にかけての物流交易システムの通時的な変遷過程を明らかにする研究は、誰も行っていない未着手の課題である。

すなわち、古代から中世における日本列島北部地域の物流交易システムの変遷過程を明確化し、北海道在地社会の文化的、社会構造的な変化を総合的に明らかにすることが北方文化研究や北方史研究、アイヌ文化研究において今後の重要な課題であると考える。

〈引用文献〉

下記以外は、「５.主な発表論文」を参照。

鈴木琢也，2012；北海道における 3～9 世紀の土壙墓と末期古墳．北方島文化研究，第 10 号，P1-40.

鈴木琢也，2011b；北海道における 7～9 世紀の土器の特性と器種組成様式．北海道開拓記念館研究紀要，第 39 号，P13-36.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

①鈴木琢也，2016a；平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容．歴史評論，No.795，P16-27（査読なし）

②鈴木琢也，2016b；擦文文化の成立過程と秋田城交易．北海道博物館研究紀要，第１号，P1-18（査読なし）

③鈴木琢也，2016c；北海道地域の動態-交流・交易を中心として-．日本考古学協会 2016 年度弘前大会「北東北 9・10 世紀社会の変動」研究発表資料集，一般社団法人日本考古学協会，P107-122（査読なし）

④鈴木琢也，2016d；須恵器からみた古代の北海道と秋田．北方世界と秋田城，考古学リーダー25,六一書房，P191-214（査読なし）

⑤右代啓視・鈴木琢也・竹原弘展・スコヴァチツィーナ，V.M，2016；千島列島における人類活動史の考古学的総合研究(1)．北海道博物館研究紀要，第 1 号，P53-72.（査読なし）

⑥鈴木琢也，2015；擦文～アイヌ文化期の物流.遺跡が語るアイヌ文化の成立，厚真シンポジウム実行委員会，P47-62.（査読なし）

⑦右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァチツィーナ，V.M，2015；北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅴ)．北海道開拓記念館研究紀要，第 43 号，P37-66.（査読なし）

⑧鈴木琢也，2014a；擦文文化にシャマニズムを探る．シャマニズムの淵源を探る，弘前学院大学地域総合文化研究所，P141-174.（査読なし）

⑨鈴木琢也，2014b；北海道の末期古墳と蕨手刀．北三陸の蝦夷・蕨手刀，岩手考古学会，P47-54.（査読無し）

⑩鈴木琢也，2014c；古代北海道と秋田の交流．古代秋田に集った人々，第 29 回国民文化祭秋田市実行委員会・企画委員会，P47-54.（査読なし）

⑪右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァチツィーナ，V.M，2014；北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅳ)．北海道開拓記念館研究紀要，第 42 号，P97-126.（査読なし）

〔学会発表〕（計 6 件）

①鈴木琢也，北海道地域の動態-交流・交易を中心として-，日本考古学協会 2016 年度弘前大会，2016 年 10 月 16 日，弘前大学（青森県弘前市）

②鈴木琢也，古代北海道と秋田城との物流交易，北方島文化研究会第 53 回研究会，2015 年 12 月 19 日，北海道博物館（北海道札幌市）

③鈴木琢也，擦文～アイヌ文化期の物流，シンポジウム「遺跡が語るアイヌ文化の成立」，2015 年 10 月 10 日，厚真町総合福祉センター（北海道厚真町）

④鈴木琢也，北海道の末期古墳と蕨手刀，岩手考古学会第 46 回研究大会，2014 年 7 月 26 日，野田村生涯学習センター（岩手県野田村）

⑤鈴木琢也，古代北海道と秋田の交流，第 29 回国民文化祭・あきた 2014 シンポジウム，2014 年 10 月 12 日，秋田市文化会館（秋田県秋田市）

⑥鈴木琢也，北日本における古代末期の交易ルート，第 30 回サイエンス・サロン研究会，2013 年 10 月 25 日，札幌市博物館活動センター（北海道札幌市）

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　琢也（SUZUKI　Takuya）
北海道博物館・研究部・学芸員
研究者番号：40342729

(3)連携研究者

右代　啓視（USHIRO　Hiroshi）
北海道博物館・研究部・学芸員
研究者番号：30213416